

平成 29 年 6 月 1 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380638

研究課題名(和文) 初期ドイツ社会学の形成史 W. デルタイ、F. テンニース、G. ジンメル

研究課題名(英文) Formation and Thoughts of Early German Sociology

研究代表者

鷹 茂 (CHO, SHIGERU)

神戸大学・国際文化学研究科・教授

研究者番号：10148489

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：「社会学」という学問の形成に歴史的にみて重大な意義を果たした19世紀後半から20世紀初頭の初期ドイツ社会学の包括的な思想的布置は、ウェーバー研究を除けば、今日に至るまで十分に解明されていないテーマである。本研究は、当時を代表するデルタイ、テンニース、ジンメルの3人の思想家の関係と相違に着目しつつ、そもそも社会学とはいかなる思想的課題を担ったものであったのかを明らかにしようとしたものである。とりわけ、ジンメルを中心におき、そこにデルタイとテンニースなどを絡ませる形で、研究を進めた。ドイツ社会学の思想的意味をめぐる研究の基礎を立ち上げるまでには、研究は確実に進捗したといえる。

研究成果の概要(英文)：Early German sociology from the end of the 19th century to the beginning of the 20th century has historic great significance in forming the discipline of 'sociology'. Comprehensive constellation of sociological thoughts in this period, however, is not yet clarified thoroughly, except Max Weber's studies. The aim of our research is to answer the question, 'What was the original meaning of sociology as thought?', by focusing on thoughts of social theory in Dilthey, Toennies and especially Simmel, who is our main interest. We examined differences and relations among these three thinkers. As a result, we could elucidate the configuration of sociological thoughts in early German sociology to a certain extent. By this clarification, we were able to lay the foundation for the studies on the history of sociology.

研究分野：社会学史

キーワード：人間科学 社会学 歴史主義 自然主義 有機体論 組織 闘争

1. 研究開始当初の背景

(1) 社会学という今日学術制度的にはほぼ定着した感のある学科は、しかし歴史的にみると各文化圏や国民国家の特性の影響を強く受けたものであり、したがってじつは今日においてもニュートラルにこの学科についての共通理解が成り立っているわけではない。そのため、そもそも社会学とは、その都度の時代において、そしてその都度の地域において、何であったかの思想史的研究そのものが、社会学の理解にとっては、重大な意義をもったテーマとなる。とりわけ、フランス、ドイツ、アメリカの社会学形成史は、この三種の社会学が20世紀の徐々に制度化に成功していく社会学の原型になったという事情もあり、社会学という学科の理解にとりわけ重要なものであることは、広く認められている。

(2) この三種の社会学形成史のうち、日本ではM・ウェーバー研究が盛んなこともあって誤解されがちであるが、ドイツにおける19世紀後半から20世紀初頭における初期社会学形成史の研究が、もっとも遅れている。全体を俯瞰するマッピング的研究の定番すら欠けている状況である。理由は、ドイツにおいては西欧(仏、英)からいわば外から流入してきた社会学なるものへの反撥がきわめて激しく、じつに錯綜した哲学的、思想的議論の応酬がなされたせいである。哲学、文学、歴史学から、経済学や統計学、法律学、心理学をも巻き込んだこの広範な論争から、徐々に社会学への肯定的反応、そればかりかドイツ文化と思想のある部分を摂取したドイツ固有とよってよい社会学の構想が提起されはじめる。この論争の全体的な包括的研究は、欧米においてすら欠けている事情もあって強く求められてきたが、思想史や概念史の詳細な手法が不可欠である事情もあって、必ずしも進捗していない。あまりにも龐大な労力と時間を要する研究であることが、事態の進展を困難にしている。しかし、このドイツ社会学初期形成史の思想的究明なしには、社会学という学科の理解はあり得ないだろう。

2. 研究の目的

(1) 本科研の目的は、19世紀後半から20世紀初頭における初期ドイツ社会学の形成史の包括的研究のための出発点ないし基礎を作り上げることである。これは相当の量の資料収集とともに、文献史的研究と理論的解析を組み合わせる必要があるものであり、きわめて難度の高い研究課題とされているものである。この研究の遂行によって、ウェーバー研究に偏りがちのドイツ社会学史研究を修正することができると同時に、今日のN・ルーマンにまで至るドイツ社会学の全体を見通す準備が整うことになる。なお本科研では直接のテーマとしては掲げていないが、当時のドイツ社会学は、アメリカ社会学にも重大な影響を与えており、その受容の仕方を

明らかにする前提的な作業にもなることであることを考えると、アメリカ社会学史への寄与も十分に見込まれるものである。

(2) 具体的な研究の目的は、当時ドイツ文化圏において「人間の科学」と総称された諸学の複合的な錯綜において、英、仏から入ってきた社会学という新興の学科がどのようなものとして把握され、いかなる理由のもとに批判され、どのような方向に修正されようとしたか、そしてその修正、つまり新しい社会学の構想の思想的狙いは何であったかを解明することである。代表者は、これまでG・ジンメルに即してこの「人間の科学」から社会学への展開を追究してきた。ウェーバー研究にも、この数十年同様の研究動向がみられる。私達はさらにここにこの時代を代表する様々の思想家の解明を重ねなければならない。とりわけ、当時の社会学形成史に欠かせないのは、時代の「人間の科学」論の代表者、そして西洋伝来の社会学批判のプロトタイプをつくり上げたW、ディルタイの思想と、哲学史、思想史研究から近代社会論を介して社会学へと移行する人物として、同じく時代を担う人物の一人であったF・テンニースの思想の究明である。他にも、A・シェッフレやW・ヴントなど考慮すべき重要な人物が存在するが、私達はジンメル、ディルタイ、テンニースの3人の名前に、この広い研究領域を象徴化させている。ウェーバーについての知見は、むろん前提である。これらの思想家における批判的、肯定的、じつにさまざまに入り混じった社会学論を対比、検討することで、初期ドイツ社会学形成史の包括的研究への端緒を開くことが、この科研の目的である。

3. 研究の方法

(1) この研究テーマは思想史的、理念史的、概念史的なものなので、まず文献収集が、重要な課題となった。この時代の書物は、後世に有名なもののみが、したがって著名な思想家のもののみが知られている状況であり、当時の社会学構想に直接、間接に関わる文献書誌に類するものがまだ存在していない。これを代表者なりに作成しつつ作業を進めることが、このテーマの必須の前提となるが、きわめて時間のかかる作業となった。日本の大学は、当時の文献をある程度所蔵しているが、今日それを使える研究者は少ない。整理状況も、必ずしもまとまったコレクションとなっていない。多くはバラバラに置かれており、これを調査して実際にみて回ること自体が、そう簡単なことではない。可能なかぎり、様々の関連文献を直接に調査すると同時に、当時の文献において言及されている引用、参照文献の探索を繰り返した。雑誌論文なのか新聞論説なのか、あるいは小さな団体が刊行したパンフレットなのか判明せず、收拾できなかった重要な文献もある。当時ドイツでは社会学は危険な学問として官憲の監視の対象でもあったので、この種のパンフレットの的なも

のなかにも歴史的にみて重要なものがある。それらは必ずしもドイツの図書館に所蔵されているとはかぎらないこともあり、複写の形であり、入手は今後の課題となっている。(2) 初期ドイツ社会学形成史は、日本や米国の場合と同様、一方で必ず受容史という方法論的スタンスを組み込まなければならない。すなわち、H. スペンサーやCh. ダーウィン、H. Th. バックルやJ. S. ミルといった英、仏の社会学的思想の受容とそれへの対決というパースペクティブが不可欠なのである。これを欠いた研究の学問的価値は低い。ドイツ文化圏にとり、社会学は、外来の異質の思想であったからである。この受容史という観点から、社会学をめぐる何点かの思想的焦点ともいえるべき問題群が必然化する。

「人間の科学」の概念における哲学その他の諸学科と社会学との関係

「人間の科学」の方法をめぐる歴史主義と自然主義の対立。とりわけ自然主義のなかでのもっとも強力な潮流であったダーウィニズム的な有機体論と社会理論の関係。

その有機体論から提起される社会学の構想とその学を実質的に支える様々のターミノロジー(専門用語)。本研究は、これらの問題群に即して文献を精査し、そこでの議論を詳細に解説していく手法を採用した。もちろんここには、類似の受容史的な文脈を背景として抱えていた経済学や政治学、法律学の成立事情との比較や、社会学と一部重なるところもあったが、基本的には異なっていた社会主義の社会理論や、キリスト教的社会倫理との対比など、付随的に重要な観点が存在している。これらの観点も随時文献の読解の際に動員された。

4. 研究成果

(1) 「人間の科学」と社会学

19世紀後半におけるドイツ思想は、哲学や倫理学にくわえて、そこに心理学、国家学、経済学などによって提起されていた様々の一層の現実的諸学科を重ねた「人間の科学」と呼称される学問のあり方をめぐる議論として、動いていく。この渦の中から、いかにのちに社会学的とされる社会理論の構想が立ち現れてくるのか、この事情の解明は大変に重要だが、同時に困難でもある。代表者は、ディルタイとジンメルにおける「人間の科学」をめぐる思想の相違と関係に着眼し、とりわけそこで生、歴史、文化、社会などの諸概念が一体いかなる関係、あるいは対立、分裂において想定されているかを究明することで、社会学という新興の学問の萌芽の形態を導きだそうとした。二人は社会学の構想に関わる重要な思想を提起しているが、微妙にその見解は異なっていた。ディルタイとジンメルという一見類似しているがしかし異なっている二人の思想家の関係は、ドイツ思想史の研究上難解な問いの一つとされている。

代表者は両者の「人間の科学」を構成する様々の鍵概念の関係、とくにそこでの社会概念と生や歴史の概念との関係づけという観点から、この両者の相違はある程度解きほぐせると考えた。研究成果は、専門学会誌において公表している。この二人の相違が、今日までの社会学にいかなる形で継承され増幅されてきたかという、さらに解明すべき問題がこのことによって開けた。第二次大戦後のドイツ社会学におけるアメリカ社会学の受容とその背後にあった人間形成論や歴史的思考にかかわるいわゆる「アンチ・ゾチオロギー」論の複雑な関係は、この二人の思想を出発点として置かないかぎり、決して理解できないだろう。すなわち、この二人の思想は、社会学という学問のあり方とそこでの分化、理解、意味といった根本諸概念のあり方に深く関わる事柄であり、ドイツ社会学史全体を見通すことにも直結する重要な問題提起となるものである。

(2) 歴史主義と自然主義、とりわけ社会有機体論の問題

この(2)の問題が、初期ドイツ社会学形成史にとり根本的問いの一つであることは、欧米の専門家においても十分に認識されている。とはいえ、ここには扱うべき膨大な文献が横たわっており、ドイツ語を母語とする研究者達すら、難渋している状況である。代表者は、この問題の解明にあたって、つねに進化論的、自然主義的、ダーウィニズム的とされ、かつ歴史主義的、美学主義的ともされたジンメルの思想における歴史主義と自然主義の関係、そこでの社会有機体論的な議論の位置と性格、社会有機体概念の修正と翻案の仕方を考察する課題をまず遂行した。さらに続いて、そこで確認された諸問題が、テニースやさらにこのテニースの前提の一人でもあったと思われるA. シェッフレにおいてどう扱われているかを、歴史を逆に辿ることで探索するという手順をとった。これは先行業績がほとんどまとまった形では存在しない領域であり、その分大きな時間がかからざるを得なかったが、テニースの社会的ターミノロジーをめぐる議論や、英、仏の自然主義的な社会学受容のドイツ的な原型を最初に形成した人物、その意味ではディルタイの歴史主義的な社会学批判の最大の標的でもあったシェッフレの大著『社会体の生命と構造』の検討などを重ねることで、19世紀後半におけるドイツ社会学形成史の文脈がどういう原理的な問題をめぐって動いていたのかを、ある程度究明できた。ジンメルについての研究成果は、長文の論文において公表しつつある。テニースとシェッフレについては、下記において言及する科研報告の印刷冊子版において、暫定的な成果をまとめた。

(3) 社会学的ターミノロジー問題

社会学の形成は、指摘してきたように19世紀後半の自然主義的社会学像に対しにか

なるスタンスを取るか、したがってそこでの有機体論的アナロジーにいかに対応するかを重要な展開軸としていた。ドイツの思想家たちは、そこに伝来の歴史主義や、理解、意味などの人文的な諸概念を加味しようとした。これは方法論的問題でもあったが、同時に具体的にいかなることばをもって社会を概念的、理論的に語るかという問題でもあった。それらの用語は、社会主義の社会理論や経済学のそれと異なっていることが必要だった。方法論争の方はよく知られているが、この後の方の論争はほとんど知られていない。当時ターミノロジーをめぐる論争と呼ばれたものである。代表者の研究は、このターミノロジー論問題が、初期社会学形成史にとり、従来ほとんど気づかれてこなかったにもかかわらず、きわめて重要であることを確認する所まで達した。これは概念史にも関わる難問であり、一層の究明は今後を期すことにならざるを得ない。このターミノロジー問題を通じて、ようやく個々の思想家の検討という研究レベルをこえて、視点を時代の思想全体へと包括的に拡大する基盤を築き得た。ただし、概念史的研究は、その文化圏の言語を母語としない研究者にとっては困難な点も多く、細部においては詰めるべき論点が多く残っている。代表者は、とりあえず、争い、闘争、競争、交換、組織、織物など後の社会学理論を構成することになる主要な諸概念が当初いかに論争的な文脈において立ち上げられていくかを解明しようとした。ある程度この種の問題については研究は進捗し得た。その暫定的成果を印刷冊子版の科研報告書としてまとめた。なお不十分の箇所は多々あるが、今後の研究の進展にとって前提となるものである。

目次

<第一部> G.ジンメルにおける競争の社会学

- < > 主旨の確認
- < > 主題としての競争
- < > 問題としての競争
- < > 「過酷」としての競争
- < > 「生の意味」のための競争
- < > 対重としての交換

<第二部> 「社会」をいかなることばで語るか 19世紀後半におけるドイツ思想の模索

- < > はじめに
- < > 人間科学のあり方をめぐる問い
- < > ターミノロジー論 オイケン
- < > ターミノロジー論 テンニース
- < > 小括

<第三部> 有機体的アナロジーと社会学的ターミノロジー

- < > はじめに
- < > 問題としてのアナロジー

< > 有機体アナロジーの問題
 < > 「組織」と「織物」、あるいは「組織」から「織物」へ
 (全251頁 203710字)

5. 主な発表論文等
 (研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)
 藤 茂、G.ジンメルにおける「社会はいかにして可能か」-第3アプリアリ論の思想的意味(4) 国際文化学研究、査読無、No.41、2013、pp.1-53

藤 茂、「ディルタイと社会学」-G.ジンメルとの関係の視点から、ディルタイ哲学の新たな切り口、査読無、2014、pp.4-67

藤 茂、G.ジンメルの「規範化様式」論(上) 近代、査読無、No.110、2014、pp.17-62

藤 茂、G.ジンメルにおける「社会はいかにして可能か」-第3アプリアリ論の思想的意味(5) 国際文化学研究、査読無、No.43、2015、pp.1-46

藤 茂、G.ジンメルの「規範化様式」論(中) 近代、査読無、No.112、2015、pp.1-53

藤 茂、哲学者ジンメル の問題提起、ディルタイ研究、査読無、No.27、2016、pp.50-67

[学会発表](計 1 件)
 藤 茂、哲学者ジンメル の問題提起、日本ディルタイ協会全国大会、2015、慶応大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤 茂 (CHO, Shigeru)
 神戸大学・国際文化学研究科・教授
 研究者番号：10148489